

たとえば、先週の日曜日に美術館へ行って、いろいろ名画を観てきて、やはり名画を観ると心が潤う気がした……、などというような話ではしようがない。

通り一遍のことなら誰でも書ける。自分だけの感想も発見もない。そんなものなら誰でも思うことで、とくに書く必要もない。

削除には多大な勇気がいる。名文なんか惜しみなく捨ててしまおう。ここであらためて名文の定義をすると、真の名文とは、用途に合った表現の文章をさすのである。テーマに沿って効果的な働きをしている文章のみが、名文というに値する。

たった一行のいかにも気の利いた文章や、格好の良い表現を名文と思い込んで、愛惜のあまり削ることができず、苦しんでいる人がいる。一行や一句の名文なんてあるはずがない。文章は前後と連結してこそ機能を果たすもので、そこだけ独立しているのではない。

私たちはどんな個人的な内容のものを書いても、あまねく大勢の人々の心に共感させ、ゆきわたらせねばならない、ということである。そんなの面倒だ、読んでくれる者だけでいいと言うなら書く資格はない。個人的主観と気持ちを綴っただけの文章を、何の関係もない他人が読んでくれることはないからだ。

あらゆるドラマの葛藤要因で普遍的テーマといえ、第一にあげられるのは人間の生老病死だ。その中でも死に関するものは、強い。共感を得やすい。映画、テレビドラマ、小説、手記などで、昔から病気物が多いのはそのせいだ。一時代前は結核、今は癌がよく描かれる。

しかし、これらの病気物ほど扱いが難しいのだ。とりあえず誰が書いても、そこそこに書ける。いちおう深刻に書けるのである。病気の症状、その進行経過や患者の苦しみ、死へいたる道程。それがとりあえず大雑把にでも書ける。だが、癌は善かれても、人間が描かれていないことが多い。

Aの作品の病人もBの作品の病人も、みな同じように見えて個性を持たない。Aの家族もBの家族も似たようなもの。病気を書いても人間が描かれず、また、癌を書いても病むことの本質が描かれてはいない。元から有する「普遍」によりかかって「特殊」をなおざりにするからだ。

人間ドラマの葛藤要因は、古今の小説、演劇を含めても、五、六十種しかないという。たったそれだけの数の中に、この世の愛別離苦、人生のすべての悲喜劇の要素が大別されるというのだ。ならば今、おびただしく出版される小説も、題材だけで選別すればみなこの中に納まってしまふ。それでも読み応えのある作品とそうでないのが歴然とあるのはなぜだろう。

インパクトのある文章ならば、題材を問う必要はない。名作が常に新しく、何回も何十回も読むに耐えうるのはそのためだ。インパクトという語には、衝突、衝撃の意味があるが、過激さと混同してはならない。それは文章の場合、目の力によってなされる。思考の力によって果たされるものだ。

良い文章とは、

- 1 自分にしか書けないことを
- 2 だれが読んでもわかるように書く

という二つの条件を満たしたもののことだ。“だれが読んでもわかるように”ということは、言葉の意味がわかるということも含んでいるが、それだけではない。“自分にしか書けないこと”、自分だけの発見や経験をできるだけ正確に言葉に表現するということを指している。